

書 評

川端有子『写真家ジュリア・マーガレット・キャメロン』

(玉川大学出版部、2019年)

浜野 志保



昨年、1990年代の「女の子写真」ブームの一翼を担わされた写真家・長島有里枝が、当時の女性写真家たちの扱いに対する異議申し立てをおこなった著書『僕らの「女の子写真」からわたしたちのガーリーフォトへ』を発表した¹。同書において長島は、女性写真家が活躍できるようになったのは、コンパクトカメラが普及して、手軽に写真が撮れるようになったからであるという「女の子写真」をめぐる当時の批評を、冷静ながらも容赦のない手つきでめった斬りにしている。実際のところ、2001年に第26回木村伊兵衛賞を同時受賞した長島、蜷川実花、HIROMIXのうち、長島と蜷川は美術大学で専門教育を受けていた。女子高生カメラマンとして脚光を浴びたHIROMIXも、写真新世紀で優秀賞を受賞する以前から、ホンマタカシに作品を見てもらっていた。要するに彼女たちは、明らかに単なる写真が好きな素人ではなかったのだが、それでも彼女たちは、若い女性であるというだけで「女の子」と呼ばれ、男性写真家と同等の「プロフェッショナル」とは見なされていなかった。

しかしながら写真というメディアは、はなから男たちの占有物ではなかった。写真術の黎明期にあたるヴィクトリア朝においてさえ、同時代の男性写真家たちを軽々と凌駕する才能を発揮した女性写真家たちが何人も存在していた。世界で初めて写真入りの本を出版したのは、植物学者・写真家のアンナ・アトキンス (Anna Atkins, 1799-1871) である。高明な科学者ジョン・ジョージ・チルドレン (John George Children, 1777-1852) を父に持ち、植物学者としてロンドン植物学協会の会員にも選ばれた彼女は、父と夫の共通の友人であるウィリアム・ヘンリー・フォックス・トールボッ

『ヴィクトリア朝文化研究』第19号(2021年)

ト (William Henry Fox Talbot, 1800-77) を通じて写真と出会い、1843年10月、サイアノタイプ (いわゆる日光写真) の図版を多数収録した『英国藻類写真集—サイアノタイプによる記録』(*Photographs of British Algae: Cyanotype Impressions*) を自費出版した。これは、商業出版された最初の写真集である『自然の鉛筆』(*The Pencil of Nature*) をトールボットが出版するより8ヶ月前のことである。

子爵夫人だったレディ・クレメンティナ・ヘイウォーデン (Lady Clementina Hawarden, 1822-65) は、二男八女の十人の子どもたちを育てながら、ロンドンにある自宅の室内で娘たちを撮影した²。室内装飾や衣装などにもこだわって撮られた彼女の作品は、ふんだんに陽光を取り入れた明るい画面が魅力で、当時の上流階級の日常生活の一部を垣間見せてくれる。現在、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館には、彼女の孫から寄贈された作品775点が収蔵されている。写真機材が高価で扱いも難しかったヴィクトリア朝において、写真に関わることができた女性の大半は金銭と時間に余裕のある上流階級の出身であり、彼女たちはまとめて「レディ・アマチュア」と称されることもある (この「アマチュア」は、いわゆる素人という意味ではなく、職業とは関係なく好奇心から熱心に探究を行ったという意味である)。ヘイウォーデン以外にも、たとえば初期のアマチュア写真家サークルには、女性の会員も多数参加していた³。

こうしたヴィクトリア朝時代の女性写真家たちの中でも、特に高い知名度と人気を誇っているのが、本書『写真家ジュリア・マーガレット・キャメロン』の主演であるジュリア・マーガレット・キャメロン (Julia Margaret Cameron, 1815-79) である。1948年に写真史家ヘルムート・ガーンシャイムが評価したことがきっかけで、ヴィクトリア朝時代の女性写真家として再注目されたキャメロンは、今日では黎明期の芸術写真を支えた写真家の一人と認識されている⁴。2016年には、生誕200年を記念してヴィクトリア・アンド・アルバート博物館が企画した国際回顧展「From Life—写真に生命を吹き込んだ女性ジュリア・マーガレット・キャメロン展」が三菱一号館美術館 (東京都) でも開催され、日本での知名度もぐっと高くなった⁵。

本書は、キャメロンと写真との馴れ初めを紹介する第1章「アニー 私の最初の成功」から始まり、写真に出会うまでの彼女の半生 (第2章「カル

カットに生まれて」、第3章「イギリスでの生活」)と、ワイト島に転居して写真に出会ってからの日々(第4章「ワイト島 写真との新しい人生」)を、彼女の作品紹介を踏まえて活写したものである。無味乾燥な評伝ではなく、キャメロンのパーソナリティが伺われるエピソードが随所に散りばめられており、読み物として非常に楽しい。たとえば、著名人たちのポートレート撮影にまつわる以下のようなエピソードなどには、読みながら思わず笑ってしまった(ワイト島でキャメロンは詩人テニソンの隣の家に住んでいた)。

テニソンを訪ねてきた人々は談笑している内に突然隣家から現れた中年の女性が「私キャメロン夫人と言います。あなた、写真を撮ってもらいたくない？どうぞこっちにいらして」というが早いなにがなんだかわからないうちに、気がつく彼女のスタジオでポーズをとらされていた、という経験をした。(p.99)

娘夫妻からカメラを贈られたことをきっかけに、48歳で初めて写真の世界に足を踏み入れたキャメロンは、写真家としては12年間しか活動していないが、その熱意は驚異的なものであった。しかも、単に趣味として写真を撮っただけではなく、自らの作品に著作権を登録し、個展を開き、展示作品を販売した。本書の冒頭に書かれているとおり、「女性が職業につくのも、財産を持つことも、ましてや投票権など望むべくもないヴィクトリア朝のさなかで、彼女はたんなる趣味ではなく専門家として、芸術家として、写真という手法で『美』をとらえようとした」(p.2)のである。

本書にはもちろん、彼女の作品も多数収録されている。黎明期の写真は、芸術ではなく工業製品に過ぎないという根強い批判にさらされていた。そうした批判に対抗すべく、オスカー・グスタヴ・レイランダー (Oscar Gustav Rejlander, 1813-75) やヘンリー・ピーチ・ロビンソン (Henry Peach Robinson, 1830-1901) など、いわゆる「ピクトリアリズム」の写真家たち(本書のコラム2「十九世紀の写真家たち」でも紹介されている)が登場した。キャメロンは、彼らと同様に絵画的なモチーフを扱いつつも、ただ絵画を模倣するのではなく、ソフトフォーカスやクローズアップといった写真的

な表現を通して幻想的なイメージを作り上げた。本書は(図版のサイズは小さいものの)主要な作品を網羅しており、誰の目にもすぐに「キャメロンの作品」と分かる個性的な作風(三菱一号館美術館での巡回展の会場にも「キャメロン風の写真が撮影できる」と称したフォトブースが設置されていた)を知ることができる。

本書がキャメロンを紹介する書籍として優れているのは、コンパクトな分量ながら、キャメロンの生涯と作品の紹介にとどまらず、彼女の作品を理解するのに役立つ背景知識が「コラム」として盛り込まれているという点である(写真の歴史／一九世紀の写真家たち／インド支配の歴史／フィクションにおけるアングロ・インディアンヒロイン／セイロン島の歴史／ヴィクトリア朝という時代／ラファエル前派の画家たち／登場する重要な文学者・そのほかの著名人／ロンドン万国博覧会／ワイト島／イギリスの貨幣制度とジュリア・マーガレット・キャメロンの写真の値段／アーサー王伝説)。本稿冒頭で言及したアトキンスやヘイウォーデンだけでなく、同時代の主要な写真家についても紹介されており、写真史におけるキャメロンの位置が分かりやすくなるだろう。また、キャメロンが大きな影響を受けたラファエル前派の画家たちや、代表作のテーマであるアーサー王伝説などについての知識は、彼女の作品を楽しむための手助けとなるはずだ。

尚、本書は、著者・川端有子氏による〈ヴィクトリア朝の女性キャリア〉シリーズの1冊目であり、続巻では、今日のイングリッシュ・ガーデンの原型を作った庭園家ガートルード・ジーキル(Gertrude Jekyll, 1843-1932)、『秘密の花園』(1911)などで日本でも人気が高い小説家フランシス・ホジソン・バーネット(Frances Eliza Hodgson Burnett, 1849-1924)が取り上げられている⁶。女性が自立して生きることが困難だった時代に、自らの才能を開花させた女性たちの姿は、21世紀を生きるわれわれにも大いに勇気を与えてくれるはずだ。

注

1. 長島有里枝『「僕ら」の「女の子写真」からわたしたちのガーリーフォトへ』(大福書林、2020年)
2. ヘイウォーデンについては、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館の

Web サイトで詳しく紹介されている。[<https://www.vam.ac.uk/articles/lady-clementina-hawarden-an-introduction> 最終閲覧日：2021 年 8 月 9 日]

3. ヴィクトリア朝時代のアマチュア写真家サークルについては、以下を参照。Grace Seiberling. *Amateurs, Photography, and the Mid-Victorian Imagination*. (University of Chicago Press, 1986) また、実作のみならず理論の分野でも、エリザベス・イーストレイク (Lady Elizabeth Eastlake, 1809-1893) が、最初期の写真論である “Photography” (1857) を書いている。
4. Helmut Gernsheim. *Julia Margaret Cameron: Her Life and Photographic Work*. (London: Fountain Press, 1948) ただし、ヘイウォーデンとは異なり、ガンシャイムによって再評価されるまでのキャメロンが、完全に忘れ去られた存在だったという訳ではない。特に、彼女の姪 (キャメロンのお気に入りモデルでもあったジュリア) の娘であるヴァージニア・ウルフは、エッセイ等で彼女について書き残している。ウルフによる唯一の戯曲『フレッシュウォーター』(初演 1935 年) では、写真に熱中しているキャメロンの様子が面白おかしく描かれている。邦訳は、ヴァージニア・ウルフ著、中島俊郎訳『フレッシュウォーター』(東京：こびあん書房、1992 年)。
5. 展示内容や会場の様子については、以下のレポートで詳しく紹介されている。「From Life—写真に生命を吹き込んだ女性 ジュリア・マーガレット・キャメロン展」[<https://www.museum.or.jp/report/845> 最終閲覧日：2021 年 8 月 9 日]
6. 川端有子『庭園家ガートルード・ジーキル』(玉川大学出版部、2020 年) および『小説家フランシス・ホジソン・バーネット』(玉川大学出版部、2021 年)

—千葉工業大学教授